

秋山：

かつて心理学を学んだ者は、他職能を見ながら学んだ。現在、心理学が職業化して行く過程で、純粋培養化し視野が狭くなってゆくという問題がある。

似田貝：

阪神震災への評判として、「福祉系の顔があまり見えなかった」と言われたことを思い出す。今回は、社会事業のボランティアが前面に出てきた。「福祉」という言葉の前に、「ソーシャルサービス」という言葉が使われていた。「セツルメント」等も、「社会事業」と言われた。それはいつの間にか、職業者となって、福祉となった。そうして、枠の中に納まった。「with から for へ」進み、それが阪神で反省されたのであった。

天野：

「自立支援法」以降、ペーパー・ワークが増え、「ケアマネ的」になっていることが、懸念されている。同機することの大切さは、薄れる。昔は本当に大変だったけれど、ドタバタしていた、その中に出会いがあり、学びがあった。それが現代は、できなくなってきた。

秋山：

肩書と職業が一致してしまう現実が展開している。

宗教と支援

谷山：

遺体安置所を回った経験から語ってみたい。想像以上に、宗教者が感謝された。宗教者と公務員の距離感「あるべき」であるが、管理者のために、関わりを増さねばならないのではと感じている。

井形：

今回、教会が避難所の代替施設となった。そうした中で、阪神震災以来社会的弱者と寄り添ってきた牧師から、「弔いをしてほしい」と言われた。「心の相談室」はそうして生まれた。身元不明者のために祈る、ということが生まれた。

今回は、警察が、身元不明者を焼くこと決定を下し、遺族の特定されないまま火葬される人々が出てきた。その身元不明者の焼却の現場を見た。儀式のない火葬、その差別の重さを感じた。

阪神でも弔いは行われた。今回は、大量の人々のために行った。それを伝えていきたい。

JMAT と心のケアを繋いだ話が出された。そこに宗教者は接続しないだろうか。宗教者の位置はどこにあるだろうか。宗教性を以て仕えることを目指しているのだけれど、いっしょに進むためにはどうしたらよいか。

天野：

自分が教育てたソーシャルワーカーの 1 割は、クリスチャンに影響されていた。最後には、宗教に